

神の国に入るには

ヨハネの福音書 3章 1-15節

はじめに

今日は、「ヨハネの福音書」からの説教となります。今日は、イエス様と「ニコデモ」という人の出会いの出来事から学びたいと思います。

1. 「ニコデモ」はどんな人か？

最初に、「ニコデモ」という人がどんな人であったのかをお話したいと思います。

1節を見ると、ニコデモは「パリサイ人」であり、「ユダヤ人の議員」であったとあります。また10節を見ると、彼は「イスラエルの教師」であったとあります。「パリサイ人」というのは、旧約聖書の律法と先祖たちの言い伝えを厳格に守る律法主義者でした。しかも彼は「教師」でもあったので、その旧約聖書の律法と先祖たちの言い伝えを人々に教える立場にありました。さらに彼は「議員」でもありました。ユダヤ人の宗教と政治に関することを扱う「サンヘドリン」と呼ばれるユダヤ人の最高議会の「議員」です。またこの「議員」という言葉は、「指導者」という意味もあります。ですからこのニコデモという人は、人々を教え、人々を指導する立場にある人でした。いわゆる彼は「上に立つ人」でした。

彼は何歳ぐらいの人だったのでしょうか。イエス様が彼に、「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません」と言われた時、彼はイエス様に、「人は、老いていながら、どうやって生まれることができますか」と返します。この言葉から想像するとニコデモはこの時すでに、「老人」になっていたのではないかと思います。

「老人」である律法の「教師」、またユダヤ人の最高議会の「議員」、それがニコデモという人です。社会的に見れば、立派な人でした。おそらく長年「教師」と「議員」を務めてきた経験豊富な人だったのでしょうか。また人々からの尊敬もある人であったのでしょうか。

しかしそのようなニコデモが、2節を見ると、ある「夜」、イエス様のもとに訪ねて来てこう言うのです。「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられなければ、あなたがなされているこのようなしるしは、だれも行うことができません」。イエス様はこの時、約30歳です。しかもついこの間まで、ナザレで大工をしていた男です。そんなイエス様に対して、「老人」であり「教師」であり「議員」でもあるニコデモが、わざわざ訪ねて来て、「先生」と呼び、「あなたは神のもとから来られた教師である」「神がともにおられる」と言うのです。

なぜニコデモは、イエス様がこのような方であると思ったのでしょうか。それは、彼がイエス様の「しるし」、つまり「奇跡」を目にしたからです。彼はイエス様の奇跡を見て、

この方こそ「神のもとから来られた教師」「神がともにおられる方」と思ったのです。

しかし彼はわざわざそのことを言うためだけに、イエス様を訪ねて来たのでしょうか。彼が訪ねて来たのは「夜」であったとあります。なぜ彼は、「夜」に訪ねて来たのでしょうか。

「夜」というのは、人々が「学ぶ時間」であったと言われます。人々は、昼間は労働し、夜は学んだのです。その意味でニコデモも、イエス様から学ぶために、訪ねて来たと言えます。では彼は、イエス様から何を学びたかったのでしょうか。それは 3 節以降のイエス様の言葉から想像しますと、彼は「何をしたら神の国に入ることができるのか」「何をしたら永遠のいのちを得ることができるのか」、そのことをイエス様から学ぼうとしていたのではないかと思います。他の聖書箇所でも、ニコデモのような「教師」であり「議員」である人たちが、イエス様にこのように尋ねています。「**先生。何をしたら、永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか**」(ルカ 10:25、18:18)。ニコデモのような「教師」であり「議員」たちの幾人かは、「永遠のいのち」や「神の国」を求めていたのです。そして彼らはお互いに、そのことについて日々議論をしていたのでしょうか。しかし、いくら議論をしても、はっきりとした答えを見出せなかったのだと思います。少なくとも、自分が「神の国に入る」、自分が「永遠のいのち」を与えられている、自分が救われているという確信を得られなかったのだと思います。ニコデモのような長年「教師」と「議員」を務めて来た人さえ、そのような確信がなかったのだと思います。彼は人々を教え、治めながらも、自分自身が身迷い、求めていたのではないのでしょうか。

彼が「夜」イエス様を訪ねて来たのは、学ぶためであると同時に、「人目を避けるため」でもあったと思います。長年「教師」と「議員」を務めてきたニコデモは、30 歳あまりの元ナザレの大工をしていた男から教えを請うている姿を、人々に見られたくないと思ったのでしょうか。またニコデモのような「教師」や「議員」たちの多くは、イエス様に対して批判的でした。ですから仲間の「教師」や「議員」たちに見られたら、後で何を言われるか分からない、そう思って彼は「夜」こっそりとイエス様を訪ねたのでしょうか。

その意味で彼は、「隠れた求道者」でした。様々な社会的な立場から、あるいはプライドから、堂々とイエス様を求めることはできない、しかし心の中では「神の国」や「永遠のいのち」、「救い」を求めている、それがニコデモでした。彼はおそらく長年それを求めてきたのではないのでしょうか。長年、人々を教え、治めながらも求め続けてきたのではないのでしょうか。しかしいっこうに確信が得られなかった。そのような時、イエス様の「奇蹟」を見たのです。そしてこの方こそ、「神のもとから来られた教師」「神がともにおられる」方だと思った、そしてこの方なら、「何をしたら神の国に入ることができるのか」「何をしたら永遠のいのちを得ることができるのか」を知っているかもしれない、そう思って彼は、思い切ってイエス様を訪ねて来たのではないのでしょうか。

2. **新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません**

ではそんな彼に対して、イエス様は何と答えるのでしょうか。3 節でイエス様はこう言わ

れます。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません」。

イエス様は、「神の国を見る」ためには、「新しく生まれる」ことが必要だと言われます。5-8節では、「神の国を見る」ではなくて、「神の国に入る」と表現されています。また「新しく生まれる」ということは、「水と御霊によって生まれる」または「御霊によって生まれる」ということだと言われます。いずれにしても、イエス様はここで、「神の国に入る」ためには、あるいは「永遠のいのちを得る」ためには、「生まれる」ことが大切だと言われるのです。

しかし私たちの中で誰か、自分の力で「生まれてきた」人がいるでしょうか。自分で何年の何月何日に生まれるということを決めて、自分の力で「生まれてきた」という人がいるでしょうか。自分の力で、この世に「生まれてきた」人は、一人もいません。「生まれる」ということは、常に「受身」なのです。私たちは誰一人、自分の力で「生まれる」ことはできないのです。「いのち」は、自分の力で得ることはできないのです。誰も自分の力で「いのち」を得、自分の力で心臓を動かし始めた人はいません。「いのち」は与えられるものなのです。

イエス様がここで言おうとしていることは、人間の力では、「神の国に入る」こと、「永遠のいのちを得る」こと、「救われる」ことはできないということではないでしょうか。ニコデモのような「教師」であり「議員」である人たちは皆、「何をしたら神の国は入ることができるか」「何をしたら永遠のいのちを得ることができるか」と考えていました。つまり人間が何かをすれば、「神の国に入れる」「永遠のいのちを得ることができる」と考えていたのです。しかしそれに対してイエス様は、「神の国に入る」のは、「永遠のいのちを得る」のは、「救われる」のは、人間の力によるものではない、神の力によるものだと言われるのです。神があなたを生まなければ、御霊があなたを生まなければ、あなたは「神の国に入れない」「永遠のいのちを得られない」「救われない」と言われるのです。

3. 人の子を信じる者はみな、永遠のいのちを持つ！

ここでイエス様は、人間の力によって「神の国に入る」道、人間が何かをしたら「永遠のいのちを得ることができる」という道を、完全に否定しておられるのです。では私たち人間は、どのようにして「神の国に入る」ことができるのでしょうか。どのようにして「永遠のいのちを得る」ことができるのでしょうか。どのようにして「救われる」のでしょうか。私たち人間に残されている道は、神の力によって「神の国に入る」道、神が何かをなさって「永遠のいのちを得ることができる」道しかありません。

その道を説明するために、イエス様は旧約聖書の出来事を語ります。その出来事とは、民数記 21 章に書かれている出来事です。モーセに率いられて荒野の旅を続けていたイスラエルの民は、ある時、神様とモーセに逆らって不平不満を口にするのです。もう私たちは、荒野の生活に飽き飽きした、と。このイスラエルの民たちの態度に、神様は怒りを燃やして、「燃える蛇」をイスラエルの民のもとに送られたのです。するとこの「燃える蛇」は、

イスラエルの民たちに噛み付き、多くのイスラエルの民が死んだのです。イスラエルの民は、神様とモーセに対する態度を悔い改めて、神様の憐れみを求めました。すると神様は一つの救いの道を示されました。それは、モーセが造った「青銅の蛇」を仰ぎ見れば、たとえ「燃える蛇」に噛まれても死なないというものでした。

イエス様がこの出来事を語ったのは、イスラエルの民が「青銅の蛇」を仰ぎ見て救われたように、私たち人間は、「人の子」を仰ぎ見れば救われるということを教えるためです。「人の子」というのは、イエス様のことです。14節でイエス様は、「**モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません**」と言われます。イエス様はこの後、「十字架」に「上げられます」。それは、私たち人間の罪を背負って神の怒りと呪いを一身に引き受けるためです。イエス様は十字架の死を経験し、復活した後、「天」に「上げられます」。それは、私たち人間に御霊を送り、私たち人間を「新しく生れさせる」ためです。

イエス様は、ニコデモに「神の国に入る」道、「永遠のいのちを得る」道、「救われる」唯一の道を示されました。それは、私たち人間の罪を背負って十字架に架かり、私たち人間のために天に上って御霊を送られるイエス様を仰ぎ見るという道です。別の言い方をすると、15節にあるように、イエス様を「**信じる**」という道です。

私たち人間には、何かをして「神の国に入る」道、「永遠のいのちを得る」道、「救われる」道はありません。私たちが何かをする代わりに、イエス様がすべてを成し遂げてくださったのです。私たちは、私たちの代わりにすべてを成し遂げてくださったイエス様を仰ぎ見て、イエス様にすべてを任せて委ねればよいのです。それこそイエス様を信じることであり、それこそ私たちに開かれている「神の国に入る」「永遠のいのちを得る」「救われる」唯一の道なのです。

ニコデモは長年、「何をしたら神の国に入れるか」「何をしたら永遠のいのちを得ることができるか」ということばかり考えていました。つまり自分が何かをすること、自分ばかり目が向いていたのです。そのため彼は、いつまで経っても「神の国に入れる」「永遠のいのちを与えられている」「救われている」という確信を持てなかったのです。

私たちが「神の国に入れる」「永遠のいのちを与えられている」「救われている」という確信を得るには、自分に目を向けるのではなく、イエス様に向けなければなりません。自分が何かをした、自分が何かをできたということに目を向けるのではなく、イエス様が私のために成し遂げてくださったことに目を向けなければなりません。そうでなければ私たちは、いつまで経っても「神の国に入れる」「永遠のいのちを与えられている」「救われている」という確信を持つことはできません。どうか、皆さんの目を、私たちの罪を背負って十字架に「上げられた」イエス様に、私たちに御霊を送り、私たちを「新しく生れさせる」イエス様に向けていきましょう。そしてすべてをイエス様に任せて委ねていきましょう。そうすれば私たちは、新しく「神様の子ども」として生まれて、神の国に入り、永遠のいのちをいただくことができるのです。

天におられる私たちの父なる神様

生まれながらの私たちは、誰も救われることはできません。私たちは人生のどこかで新しく生まれなければ、救われることができません。しかし私たちは、自分の力で新しく生まれること、いのちを得ることはできません。私たちには、イエス様にお任せするしかありません。あなたに委ねることしかできません。信仰を持つことしかできません。どうかあなたにすべてを委ねますので、私たちを神様の子どもとして新しく生まれさせ、神の国、永遠の命まで導いてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。